

命題的内容の起源

伊藤 謙佑 (Kensuke Ito)

同志社大学 文化情報学部

ある内容が命題的である場合、その内容は、真偽の評価が可能であり、主語述語構造を備えており、否定をはじめとする論理的操作を許容する (Millikan 2004)。こうした互いに関連する特徴をもつ命題的内容はどのようにして成立しているのだろうか。たとえば、「フレーゲはラッセルより年長である」という文が表現する真の命題は、同じ構成要素からなる「ラッセルはフレーゲより年長である」という偽の命題から区別されて、いかにして成立しているのだろうか。「命題の統一性」として知られるこうした伝統的な問題を、本発表ではつぎのように読み替える。すなわち、ヒトの認知的発達のどの段階で命題的内容の帰属を経験的に正当化できるのだろうか。そのうえで、否定の獲得に関する実験を比較することによって、この問題への解答を試みる。

発達心理学で標準的なモデルによれば、否定の獲得は、拒絶 (rejection)、非存在 (non-existence) の認知、そして真理関数的否定の端緒である否認 (denial)、という三つの段階を通して達成される (Dimroth 2011)。ヒトが否認の段階に進むのは2歳を過ぎてからであり、その完全な理解に至るにはさらに年数を要する。一方、他の動物は、拒絶や非存在の認知を習得できても、否定語の理解や使用が求められる否認の段階へ進むことはないとされている。こうした結果は、たしかに、言語を持たない動物は論理的に思考することができない、という哲学の分野での標準的見解に合致する。しかし、2歳未満の前言語的な幼児やチンパンジーなどの非言語的な動物も論理的な推論が要求されるタスクを達成できるという見解も一定の支持を得ており、それに従うなら、否定や選言といった論理的操作に習熟するためにはかならずしも言語は必要ない、ということになり、哲学的標準と齟齬をきたす。

このように、否定を扱う能力が帰属可能な条件については、まだ見解が一致していない。本発表では、論理的に推論する能力は言語を使用できる動物に固有であるという立場を擁護しながら、認知主体の表象する内容が命題的であるとみなせる経験的な基準を検討する。

参考文献

- Dimroth, C. (2011). The Acquisition of Negation. In L. Horn (Ed.), *The Expression of Negation*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Millikan, R. G. (2004). *Varieties of Meaning*. Cambridge, MA.: MIT Press.